

寺田寅彦

球  
根





球

根



九月中旬の事であつた。ある日の昼ごろ堅吉けんきちの宅うちへ一封の小包郵便が届いた。大形の茶袋ぐらいの大きさと格好をした紙包みの上に、ボール紙の切れが縛りつけて、それにあて名が書いてあつたが、差出人はだれだかわからなかつた。つたない手跡に見覚えもなかつた。紙包みを破つて見ると、まだ新しい黄木綿きもめんの袋が出て来た。中にはどんぐりか椎しいの実みでもはいつているような触感があつた。袋の口をあけてのぞいて見ると実際それくらいの大きさの何かの球根らしいものがいっぱいはいつてい

る。一握り取り出して包み紙の上に並べて点検しながらも、これはなんだろうと考えていた。

里芋の子のような肌合はだあいをしていたが、形はそれよりもっと細長くとがっている。そして細かい棕櫚しゅろの毛で編んだ帽子とでもいったようなものをかぶっている。指でつまむとその帽子がそのままですぼりと脱け落ちた。芋の横腹から突き出した子芋をつけているのもたくさんあった。

子供らが見つけてやって来ていじり回した。一つ一つ「帽子」を脱ぎ取って縁側へ並べたり子芋の突起を鼻に

見立てて真書筆しんがきでキューピーの顔をかき上げるものもあつた。

何か西洋草花の球根だろうと思つたが、なんだかまるで見当がつかなかつた。彼はわざわざそれを持って台所で何かしている細君に見せに行つたが、そういう物にはさっぱり興味のない細君はろくによく見る事もしないで、「存じません」と言つたきり相手になつてくれなかつた。老母も奥の隠居部屋いんきよべから出て来て、めがねでたんねんに検査してはいたが、結局だれにもなんだかわからなかつた。

「ひよつとしたら私の病気にでもきくといふのでだれかが送ってくれたのじゃないかしら、煎<sup>せん</sup>じてでも飲めというのじゃないかしら」こんな事も考えてみたりした。長い頑<sup>がん</sup>固<sup>こ</sup>な病氣を持てあましている堅吉は、自分の身边に起こるあらゆる出来事を知らず知らず自分の病氣と関係させて考えるような習慣が生じていた。天性からも、また隠<sup>いん</sup>遁<sup>とん</sup>的<sup>てき</sup>な学者としての生活からも、元来イーゴイストである彼の小自我は、その上におおっている青白い病のヴェールを通して世界を見ていた。

もつとも彼がこう思ったのはもう一つの理由があつ



た。大学の二年から三年に移った夏休みに、呼吸器の病気を発見したために、まる一年休学して郷里の海岸に遊んでいたころ、その病気によくきくと言つてある親戚しんせきから笹百合ささゆりというものの球根を送つてくれた事があつた。それを炮烙ほうろくで炒いつてお八つの代わりに食つたりした。それは百合ゆりのような鱗片りんぺんから成つた球根ではあつたが、大きさは格好は今度のと似たものであつた。彼はその時分の事をいろいろ思い出していた。焦げた百合の香ばしいにおいや味も思い出したが、それよりもそれを炒つてくれた宿の人々の顔やまたそれに付きまとうた淡いロマン

スなどもかなりにはつきりと思ひ出された。その時分の彼はたとえ少々の病氣ぐらいにかかっても、前途の明るい希望を胸いっぱいにいただいただけに悲観もしなければ別にあせりもしなかつた。そして一年間の田舎いなかの生活いなかをむしろ貪欲どんよくに享樂していた。それが今、中年を過ぎた生涯しょうがいの午後ごごに、いつなおるか分からない頑固な胃病に苦しんでいる彼の心持ちは、だいぶちがったものであった……のみならず今度の病氣は彼の外出を禁じてしまったので前の病氣の時のように、自由に戸外の空氣に觸れて心を紛らす事ができない。使えば使われそうに思わ

れるからだを、なるべく動かさないようにしていなければならぬのが苦痛であつた。それでもはたで見ると、退屈はしていなかつた。彼の読書欲は病気になつて以来、いつそう増進して、ほとんど毎日朝起きるとから夜寝るまで何かしら読んでいた。そんなに本ばかり読んでいては病気にさわりはしないかと言つて、細君や老母が心配して注意する事もあつたが、彼自身にはそんな心配はないと言ひはつていた。實際彼の頭脳は病気以来次第にさえて来て、終日読書していても少しも疲れないのみならず、自分でも不思議に思うほど鋭く働いていた。何か読

んでもそこに書いてある事の裏の裏まで見通されるような気がしていた。読んで行く一行一行に、あらゆる暗示が伏兵のように隠れていて、それが読むに従って、飛び出して襲いかかるのであった。それらの暗示のどれでも追求して行くとほとんど無限な思索の連鎖をたぐり寄せ、事ができた。そしてそれらの考えがほとんど天啓でもあるように強く明らかに、無条件に真であって、しかもいずれもが新しい卓見でもあるように彼には思われた。新聞の三面記事を読んでいる時でさえ時々電光のひらめくようにそのような考えが浮かんだりした。そんな

時には手帳の端へ暗号のような言葉でその考えの端緒を書き止めたりしていた。しかしそのような状態はいつまでも持続するわけではなくて、これと反対な倦怠けんたいの状態も週期的に循環して来た。そういう時には何を讀んでも空虚であった。そこに書いてある表面の意味をとらえる事すら困難であった。そうした時に手帳をあけて自分の書いてある暗号のようなものを見ると、ほとんどなんの意味をも成さない囁語たわごとでなければ、きわめて月並みないやみな感想に過ぎなかった。どうしてこんなつまらない考えがあればほどに自分を興奮させたか不思議に思われる

のであった。それでひよつとすると自分は一種の誇大妄こだいもう想そうきよう狂きやうに襲おそわれているのではないかと思つて不安を感じる事もあった。そういう時の彼はみじめな状態にあつた。世界を埋め尽くした泥どろの底に自分がうごめいているような気がしていた。しかし再び興奮の発作が来ると彼の頭は靈妙な光で満ち渡ると同時に、眼界をおおっていた灰色の霧が一度に晴れ渡つて、万象が透き通つて見えるのである。

このように週期的に交代する二つの世界のいずれがほんとうであるかを決定したいと思つて迷っていた。――

おそらく彼は生涯しょうがいこのわかりきったようで、しかも永久に解く事のできないなぞを墓の中まで持ち込むかもしれない。なかつた。

彼の生活が次第次第に実世間と離れて行くのを自分でも感じていた。彼と世間を隔てている透明な隔壁が次第に厚くなるのを感じていた。そしてその壁の中にこもつて、ただひとり落ち着いて書物の中の世界を見歩き、空想の殿堂を建ててはこわし、こわしてはまた建てている時にいちばん幸福を感じるようになって来た。彼は時々そのような生活の価値を疑ってみない事はなかつたが、

しかしどうにもならないと思っていた。この隔壁は自分で作ったものでもなければだれかが持って来たものでもなかった。そうしてひとりでにできたこの壁を打ち破るという事ができるとしても、その努力は今の健康が許さないと思っていた。そう思つてむしろ安心しているそばで、またこうしてはならないという不安の念が絶えず襲いかかって来た。利己的であると同時に気の弱い彼は、少なくとも人目にはたいした事ではないと思われらしい病氣のために職務を怠っている事に対する人の非難を気にしていた。それで時々彼を見舞いに来る友人らがなん



の気なしに話す世間話などの中から皮肉な風刺を拾い上げ読み取ろうとする病的な感受性が非常に鋭敏になっていた。たとえば彼と同病にかかっていたながら盛んに活動している先輩のうわさなどが出ると、それが彼に対する直接の非難のように受け取られた。そうした夜は夜ふけるまでその話を分析したり総合したりして、最後に、その先輩と自分との境遇の相違という立場から、二人のめいめいの病気に対する処置をいずれも至当なものとして弁明しうるまで安眠しない事もあった。またたとえばある日たずねて来た二人が自分たちの近ごろかかった病氣

の話をしてしているうちに、その一人が感冒で一週間ばかり休んで寝ていたが、実に「いい気持ち」であつたと言つて、二人で顔を見合わせて意味ありげに笑つた。そのよ  
うな事でさえ彼の血管へ一滴の毒液を注射するくらいな  
効果があつた。二人が歸つて後にぼんやり机の前にすわ  
つたきりで、その事ばかり考えていた。そういう時には  
彼の口中はすっかりかわき上がつて、手の指がふるえて  
いた。そうして目立って食欲が減退するのであつた。彼  
自身にも、それが病的であるという事を自覚しないでは  
なかつたが、その自覚はこのような発作を止めるにはな

んの役にも立たなかつた。そんな時に適当な書物を読めばいいことも知っていたが、発作のはげしい時には書物をあけて読もうと思つて努力しても、心はすぐ書物を離れて、もとの暗やみへずり落ちて行つた。むしろその暗やみへ向かつて飛び込んで行くと、ある時間の後にはどこからか明かりがさして来て夜の明けるようになるのであつた。

同じように人から来る手紙の中の言葉などにもかなりに敏感になつていた。またたとえば絵はがきの絵や、見舞いの贈り物などからさえも、ほとんど他人には想像も

つかないような「意味」を感得する事があった。

そういう状態にある彼は、今この差出人の不明な、何物とも知れぬ球根の小包を受け取って無頓着むとんちやくでいるわけにはゆかなかったのである。

彼は一度紙屑籠かみくずかごへほうり込んであった包み紙やひもや名あて札をもう一ぺん検査して見た。ひもにはりつけた赤い紙片の上にはってある切手の消印を読もうとして苦しんでいたが、消印はただ輪郭の円形がぼんやり見えるだけであった。「実に無責任だなあ」郵便局に対する不平を口の内でつぶやきながら、空虚な円の中から何かを

見いだそうとして、ためつすがめつながらめていた。

失望の後に来る虚心の状態に帰って考えてみると、差出人のおおよその見当は、もう小包を手にした瞬間からついていたのであった。郷里にいる二人の姉のいずれかよりほかに、こういう物を送って来そうな先は考えられなかった。去年の秋K市の姉から寒竹の子を送ってくれた事、A村の姉からいつか茶の実をよこした事などが思い出された。そう言えば前にも今度と同じような鬱<sup>うこんも</sup>金木綿<sup>めん</sup>の袋へ何かはいつて来た事も思い出したが、あいにくそれがどちらの姉だったか思い出せなかった。

あて名の手跡は二人の姉のとはまるでちがっていた。

しかし、二人ともにそうだが、ことにK市の姉はよく孫のだれかに手紙の上封などをかかせる事があるからと思つて、戸棚とだなの中から古手紙の束を出して来て、いくつかの姉の手紙を拾い出して比べて見た。

K市の姉からのあて名の手跡の或るあものは小包のと似ているように思われた。たとえば「東」の字や、ことに「様」のつくりの格好がよく似ていた。しかしまたよく見ると「町」の字などはかなり著しくちがっていて、全く同人の手であるとは断定しにくいようなところがあつ

た。一方でA村の姉のはほとんど自筆で、たまに代筆があつても手跡は全くちがつていてこのほうはほとんど問題にならなかつた。

「まだ研究していらつしやるの。……あなたもずいぶん変なかたねえ。いまに手紙かはがきが来ればわかるじやありませんか。」

台所から出て来た細君は彼が一心に手跡を見比べているのを見て、じれつたがつて、こう言つた。

「手紙のほう小包よりさきに来そうなものだが。」  
「だって、そりやあ、……あとから来る事だつてあるじ

やありませんか。」

「……この『様』の字をちよつと比べて見てくれ。どうも同じ手だと思ふんだが……。」

「ええ、そうですよ。……きつとそうですよ。」

めんどうくさくなつた細君は無責任な同意を表しはしたが、それでも堅吉はいくらか安心したらしく、散らかした手紙をそろそろ片付けていた。

K市の姉からだとする、一つ思い当たる事があつた。彼女が去年まで家を貸してあつた中学教師のスイス人が毎年いろんな草花を作つていた。半分は楽しみであつた



ろうが半分は内職にしているらしいという事であつた。なんでも草花の種や球根を採つてはY港のある商館へ売り込みに行くらしかつた。その西洋人が去年シヤンハイへ転じて行く時に、姉の貸し家の畑へ置きみやげにいろいろなものを残して行つただらうという事は、きわめてありそうな事である。それがことしたくさん蕃殖はんしよくしたのでこちらへも分けてよこしたものだらう。

そう考えると堅吉の頭の中が急に明るくなるような気がした。同時にこの球根がなんだという事もはっきりわかつたような気がした。「そうだ、フリージアだ。フリ

ージアに相違ない。」

彼の意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしていたこの花の名が急にはっきり浮き上がって来た。それと同時に彼は始めに小包をひらいてこの球根を見た瞬間から、すでにもう「フリージア」という名がすぐ手近な所に隠れていたように思われだした。意識の深い奥のほうからこれが出よう出ようとするのを、不思議な、ほとんど無自覚な意志の力で無理に押えていたのだというような気がした。

なぜ「フリージア」という名が突然に現われたか。そ

れには積極的と消極的と二つの理由があつた。第一前に言つたスイス人がいろいろの花のうちでもなかんずくたくさんにこの花を作っているという事を姉から聞いていた。その時に姉がこの名を妙な発音で言つた事も彼に特殊な印象を強めたのであつた。それでこの名がこの西洋人と球根という組み合わせに密接な連合をしていたのであつた。もう一つの消極的な理由はこうである。

堅吉は二三年前に今の家に引っ越してから裏庭へ小さな花壇のようなものを作つて四季の草花などを植えていた。去年の秋は神田の花屋で、チューリップと、ヒアシ

ンスと、クロツカスとの球根を買って来て、自分で植え  
もし、掘り上げもしたので、この三つのものはよく知っ  
ていた。そのほかにまだグラジオラスの根やアネモネの  
根もずっと前に見た記憶があった。これに反して、偶然  
な回り合わせでフリージアの根だけはまだ見た事がなか  
ったのであった。これまで花屋で鉢植えはちうの草花などを買  
う時に、この花は始終に目をつけていたにかかわらず、  
いざ買うとなると、どういうものか、自分にはわからな  
い不思議な動機でいつも他の花を買うのであった。品の  
いい、においのいい花だと思ってほしがっているくせに、

いつでもそばの派手な花に引きつけられていた。それで彼はこれまで一度もこの花を自分の家の中に持った事もなく、それがどんな根をもっているかも知らなかった。ただそれが球根であるという事だけを単なる知識として知っていただけである。

今そう思って見ると、この球根はそれ自身でいかにも、花として彼の知っているフリージアに適切なものらしく思われて来た。彼は球根のにおいをかいでみたりした。一種の香はあったがそれは花のにおいを思い出させるものではなかった。

フリージアだとすると、どこへ植えたものだろうと思  
って考えていた。彼の過敏になつた想像はもうそれが立  
派に生育して花をつけたさまを描いていた。某画伯のこ  
の花を写生した気持ちのいい絵の事をも思い出したりし  
ていた。

再び通りかかった細君に「オイわかったよ、フリージ  
アだよ、これは……」と言って説明しようとした。それ  
からまた老母の所へ行つて植え付け場所を相談したりし  
た。

翌日になるとはたしてはがきが来た。球根はフリージ

アに相違なかつたが、差出人は堅吉の思いもかけない人であつた。それはK市ではなくてA村の姉の三男が分家している先からであつた。平生は年賀状以外にほとんど音信もしないくらいにお互いに疎遠でいた甥おいの事は、堅吉の頭にどうしても浮かばなかつたのであつた。

しかしこう事実がわかってみると、堅吉の頭は休まる代わりにかえってまた忙しくならなければならなかつた。

第一には手跡の問題であつた。小包のあて名の字は甥らしかつた。それがどうしてK市の姉の手紙のあて名に

似ているかが不思議であつた。もしK市の姉の孫——この姉のむすこはなくなっていた——が手紙のあて名を書いたのだとすると、それがどうしてこれほどまでよく、その子供の父の従弟いとこのに似ているかが不思議であつた。しかしA村の甥おいがK市の姉すなわち彼の伯母おばのために状袋のあて名を書いてやったという事もずいぶん可能で蓋然ぜんであるように思われた。しかしふたつの手跡は似ていると言いながら全く同じであるとは考えにくい点もないではなかつた。

もう一つのわからない事は、平生別に園芸などをやつ



ているらしくもない——堅吉にはそう思われた——甥おいが  
どうしてフリージアの根などをよこしたかが不思議に思  
われた。どうも、このフリージアの種は、やはりK市の  
姉のほうから縁を引いたものではないかと思われてしか  
たがなかった。夫婦暮らしで比較的閑散な田園生活を送  
っている甥が、西洋草花を栽培しているのは自然な事だ  
と思うだけではなんだか物足りないように思われるので  
あった。

堅吉はすぐ甥にあててはがきを書いて、受取と礼の言  
葉を述べた末に、手跡の不思議と球根の系図に関する想

像を書いてやった。

なんとか返事があるかと思つて待つていたが十日たつてもついに来なかつた。考えてみると彼は別に返事を要求するようなふうの書き方をしたわけではなかつた。少なくとも甥のほうではそうは取らなかつたに相違ない。

もう一度わざわざそんなことを聞いてやるのも、おかしいと思つてそれきりにしてしまつた。

花壇の縁に植えた球根はじきに芽を出して勢いよく延びて行つた。堅吉はこの草の種を絶やさないでおけば、いつかは彼の「不思議」を明らかにする機会が来るだろ

うと思っっている。しかしそれは——だれが知ろう。

自分の内部の世界のすみからすみまでを照らし尽くすような気がしても、外の世界とちよつとでも接触する所には、もう無際限な永遠の闇やみが始まる、という事がおぼろげながらも彼の頭に芽を出しかけていた。

(大正十年一月、改造)



日本文学電子図書館

---

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
昭和45年8月20日 第38刷発行

---



日本文学電子図書館